



愛猫のカメと一緒に、書斎で筆をとる恒子 昭和46年(1971)頃撮影

# 大田区立熊谷恒子記念館版 記念館ノート

## 創刊号

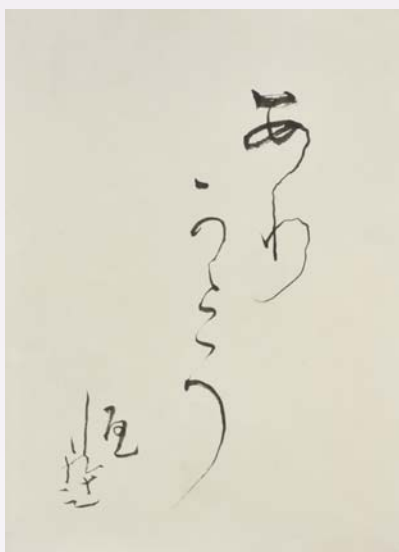
発行：2017年3月1日  
編集：大田区立熊谷恒子記念館

## 館のトピック

### ◆絶筆《ありがとう》

大田区立熊谷恒子記念館の談話室には、熊谷恒子の絶筆《ありがとう》が常設展示されています。恒子が、亡くなる九日前である昭和六十一年(一九八六)年九月二十一日に病床で筆と紙を求めて書いた最後のかなです。逝去の翌年の朝日新聞社主催「現代書道二十人展」に出品されました。

恒子は、昭和を生きた書家として才能・名譽・家柄・容姿等、いずれも優れた女性でしたが、その裏側で多くの苦勞を背負っていました。例えば、書家として活躍し始めたばかりの昭和十三(一九三八)年に彼女は緑内障で右目を失明しました。さらに、彼女の娘は幼い頃から病弱で、恒子は長い年月に渡り看病を続けていましたが、その介もなく先立たれてしまいました。恒子は、これらの不幸と対峙しながらも《ありがとう》という言葉で生涯を締め括ったのです。本作品は、彼女の心映えの美しさを感じるこのできる書です。



《ありがとう》昭和61年(1986)

## 平成29年度の予定

### 1. 熊谷恒子・かなの美展

- ・「蓮月尼のうた」4月29日(土)～8月20日(日)
- ・「散らしの妙(仮)」9月2日(土)～12月10日(日)
- ・「たおやかな線(仮)」12月22日(金)～平成30年4月26日(木)

### 2. 庭園公開

- ・「春の庭園公開」4月29日(土)～5月7日(日)

### 3. 夏のワークショップ

詳細未定※詳細は「Art Menu」、公式HPに掲載予定

## 館の基本情報

### 《所在地》

大田区立熊谷恒子記念館  
〒143-0025 大田区南馬込4-5-15  
TEL 03-3773-0123  
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/kumagai>

### 《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで  
※入館は午後4時まで
- 入館料 大人 200円、小中学生 100円  
※65歳以上(要証明)、6歳未満は無料
- 休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、  
年未年始、臨時休館

# 平成二十八年年度鑑賞教育の実施報告

大田区立熊谷恒子記念館担当学芸員 荻野 祐子

## はじめに

平成二十八年（二〇一六）十二月十八日（日）大田区立熊谷恒子記念館では、開催中の「かなの美展 黒と白の線表現」かすれ」において高校生対象の鑑賞教育を実施した。対象者は、東京都高等学校書道教育研究会（以下「都高書研」と略す）に所属する書道科教員と東京都文化連盟加盟校四校の高校生十名であった。高校生対象の鑑賞教育は、開館以来初めての試みである。本稿では、実施内容の詳細を報告したい。

## 一 経緯

同年十月二十五日、都高書研の研部より会に所属する高校生への鑑賞教育の依頼があった。都高書研が毎年数回美術館などで開催する課外研修先の候補として当館を選択した。仮名書は、現代の国語教育では学ぶ機会のない変体仮名の使用という障壁によってか、他の書表現と比べて敷居の高い書となっている。当館は、仮名書鑑賞の普及活動として新規に鑑賞教育を試みることにした。

## 二 目的と課題

依頼者との打ち合わせの結果、目的は、対象者の書に対する理解を深めてより創造的で自由な書表現を育くむこととした。今回の展示は「線表現」という熊谷恒子の仮名書の造形性に注目した展示であるため、対象者が書の造形性についてより深く考えることのできる三つの課題を立てた。これらの課題を考えることで仮名書とその表現についてを知り、また熊谷恒子の書を知る契機としたい。

課題一「濁筆」印象に残った「かすれ」の線を見つけてみよう。なぜ、どのように印象に残ったのか理由についても記入してください。

濁筆という技法は、墨を筆に少なめにとり、線をかすれさせる技法である。書のダイナミズムや時間性を強調する表現として濁筆を使用する書も多いが、恒子の書においては、薄さや軽さ、幽玄さ、遠近の表現等、様々な日本の情緒を視覚的に表現するため

の技法であり、書の空間に広がりを持たず役割を果たしている。また、依頼者から「線がかすれることは失敗であると考えている生徒が多く、かすれることもまた表現であるということを経験した」という希望があった。

課題二（散らし書き）空間の使い方が面白い書、空間をバランス良く使っている書を探してみよう。その理由も記入してください。

散らし書きという技法は、行の頭を揃えずに空間を上下に長く短く自由にとり、文章の書き方の基本に捕らわれずに書く技法である。平安時代より仮名書では親しまれてきた技法であり、二十世紀になるまで漢字など他の書表現は行頭を揃えて書く行書きが主流の中、仮名書だけが用いてきた特徴的な技法である。上代様（平安期の仮名）の臨書（手本を見ながら真似て書くこと）を繰り返して仮名を学んだ恒子の書は、空間使いに優れているものが多く、上代様よりも自由に仮名を散らしている。また、「散らし書き」へのこだわりをいくつもの著作に記している。

課題三（かな書における漢字の使用）かな書に使われている漢字を探してみよう。また、印象に残る漢字をみつけ、なぜ・どのようにならしたのか理由を記入してください。

仮名書には、常用の仮名、変体仮名、漢字の三種類の文字が使用されている。二種類の仮名は、表音文字であり、一文字では音のみを示して意味を持たず、複数の文字が集合することによって、初めて意味を持つ文字である。だが、漢字は表意文字であるため、一字だけで高い象徴性を帯びた表現が可能となる。恒子は、仮名を書くにあたり漢字を習う必要性を感じ、漢字の書家である岡山高陸の門を叩いた。それは、仮名の原型としての漢字を学ぶためであったが、恒子は漢字の特性もよく理解して仮名書に生かしていたのである。



## 三 実施内容（二時間）

鑑賞教育の当日は、担当学芸員が鑑賞マナーや当記念館の概要について、熊谷恒子の人物像についての説明をし、前述の課題が書かれている記入式のワークシートを対象者に配布した。その後、二十五分間の自由見学とワークシート記入の時間を設けた。記入後に再び集合し、ギャラリートークを開始した。ギャラリートークでは、対象者が学芸員の展示解説に主体的に関わっているように、課題ごとに作品を選択し、その理由を語り合った。その後、対象者十名は資料閲覧室へ移動し、感想として短冊に仮名を一筆したためて解散した。

最後に、見学者の教員十名から学芸員への質疑応答を行い、都高書研対象の鑑賞教育は終了となった。

## 四 今後の課題

今回鑑賞教育に参加した都高書研の二十名は、全て書道を嗜む書道部の生徒と顧問の教員であった。従って、彼らが鑑賞教育に求めていたのは、実践に直接結びつく知識や方法を学ぶことだったということが、質疑応答で明らかになった。また、ワークシートの課題内容の意図についても質問が寄せられた。今後は、すでに本稿で述べてきたような課題内容の意図やギャラリートークの方法等を事前に説明することで、鑑賞教育に関する十分な理解を促していきたい。

また、ギャラリートークにおいてワークシートは、対象者の自由な感想や意見を引き出すためのきっかけとなるものを想定していたが、実際の解説は、対象者の自由な感想を進展させて会話を生み出すというより、意図する仮名書の技法について話題を誘導してしまいがちであった。はにかみがちの対象者が、より主体的にギャラリートークに参加するためには、様々な工夫が必要とされる。今後の課題として模索していきたい。

## 主要参考文献

- ・栗本高行「墨痕」森話社 平成二十八年
- ・熊谷恒子「連載 假名學習法」『書道』一六号 泰東書道院出版部 昭和十二年
- ・熊谷恒子「書道かな 基礎から創作まで」マコー社 平成三年
- ・山中千紗子「書家・熊谷恒子の軌跡」日記からみる人物像『大田区立熊谷恒子記念館所蔵作品図録』公益財団法人大田区文化振興協会 平成二十七年